

学部・研究科等の現況調査表

研 究

平成 2 2 年 6 月

人間文化研究機構

目 次

6 . 国立国語研究所

6 - 1

6. 国立国語研究所

I	国立国語研究所の研究目的と特徴	6 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	6 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	6 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	6 - 5
III	質の向上度の判断	6 - 7

I 国立国語研究所の研究目的と特徴

1. 研究目的

国立国語研究所（以下「国語研」という）は、言葉の研究を通して人間文化に関する理解と洞察を深め、国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に貢献するため、国内外の研究機関・研究者との広範な共同研究を通して世界の中の日本語が持つ特質と普遍性を総合的に解明し、その研究成果を広く社会に発信することを目的とする。

2. 特徴

(1) 研究活動

言葉をコミュニケーションの道具としてだけでなく、文化や思考の源泉となる人間の知的活動として捉え、言語理論、日本語学、対照言語学、文献学、心理学、自然言語処理、言語習得など多角的アプローチにより日本語の全体像を解明すべく研究活動を展開している。日本語消滅危機方言の大規模調査研究プロジェクトが大きな特色であり、外国人に対する日本語教育に資する調査研究も積極的に行っている。研究所の英語名を **National Institute for Japanese Language** から **National Institute for Japanese Language and Linguistics** に変更することにより日本語研究の国際的拠点となることを目指している。

(2) 共同研究・共同利用

日本語研究の国際的中核拠点として、日本語及び日本語教育に関する各種の研究文献情報・研究資料を広範囲に収集・整理し国内外に発信すると共に、現代日本語コーパスのモニター版を公開し各方面での試験的利用に供している。また、優れた研究実績を有する専門家を国内及び海外から客員教員として招聘し、共同研究の多様化・高度化・国際化を図っている。

(3) 研究実施体制

4 研究系と 3 センター（資料 1 参照）の間での兼務体制や各種共同研究プロジェクトの相互連携により、研究所全体として高い学術水準を保ち、客観性・一般性を備えた研究成果の提供を図っている。また、国際交流を促進するため、専任の外国人教員を複数名採用している。

〔想定する関係者とその期待〕

想定する関係者：日本語学、言語学、日本語教育、諸外国語学、外国語教育、認知心理学、自然言語処理、情報通信、機械翻訳、音声情報処理、脳科学など言語に関する研究者コミュニティ、並びに研究成果の発信先となる一般社会。

主な期待：研究拠点としての機能充実、日本語研究の国際化、全国規模での消滅危機方言の調査・保存、大規模日本語コーパスの完成と共同利用化、外国人に対する日本語教育に資する調査研究。

Ⅱ 分析項目ごとの水準の判断

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

① 研究体制の整備

「理論・構造研究系」「時空間変異研究系」「言語資源研究系」「言語対照研究系」の4研究系と「研究情報資料センター」「コーパス開発センター」「日本語教育研究・情報センター」の3センターで組織し、相互の有機的連携のもとで研究を推進する体制を整備した(資料1)。なお、日本語教育研究・情報センターの体制整備については、基本理念や専任研究教育職員の配置等について運営会議外部委員から意見を聴取するなど、特段の配慮を持って実施した。

② 大学共同利用機関としての広報活動

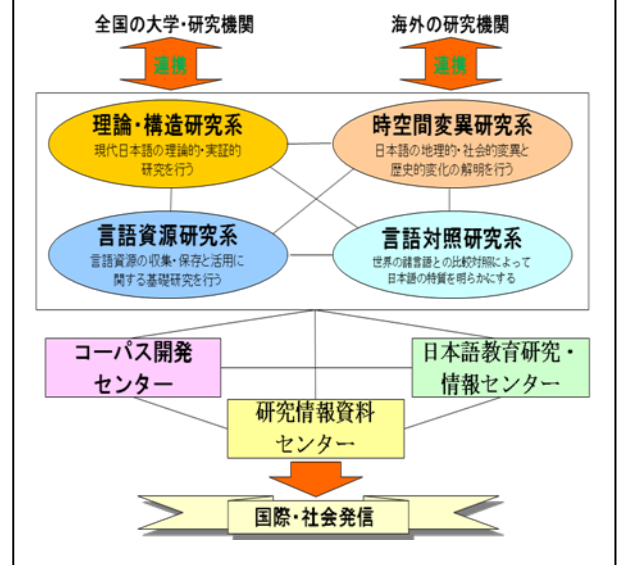
新研究所のミッションを研究者コミュニティに周知するため、研究所概要を印刷物とウェブの両方で公にすると共に、研究者向けの国際学術フォーラムを2回、一般向けの公開シンポジウムを1回開催した(別添資料1)。

③ 共同研究プロジェクトの開始

4研究系の教授をプロジェクトリーダーとする基幹型共同研究(中期計画を支える大型プロジェクト)を13件開始した(資料2)。共同研究の企画に際しては、プロジェクトごとに最適の研究者を国公立大学及び海外研究機関から共同研究者として委嘱し、最善の布陣で研究を始動させた。また、共同研究メンバーは固定化することなく、計画の進展に応じて追加を可能にする柔軟な体制とした。平成21年度末現在の共同研究者数は、延べ219名となっている(資料2)。

また准教授中心に、独創・発展型及び萌芽・発掘型と呼ぶ中小規模の共同研究も10件(共同研究者数延

資料1 研究組織



資料2 基幹型共同研究の共同研究者数一覧

- ・ 日本語レキシコンの音韻特性……………20名
- ・ 日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性……………21名
- ・ 文字環境のモデル化と社会言語科学への応用……………18名
- ・ 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究……………11名
- ・ 方言の形成過程解明のための全国方言調査……………22名
- ・ 多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明……………8名
- ・ 日本語変種とクレオールの形成過程……………4名
- ・ コーパスアノテーションの基礎研究……………10名
- ・ 通時コーパスの設計……………8名
- ・ コーパス日本語学の創成……………31名
- ・ 形容詞節と体言締め文：名詞の文法化……………28名
- ・ 節連接へのモーダル的・発話行為的な制限に関する研究……………34名
- ・ テンス・アスペクト・ムードの相関に関する言語対照研究……………4名

べ 86 名) 立ち上げている(資料 3)。いずれのプロジェクトも、立ち上げに際しては、運営会議における審査を経ている。

④内外の研究者の受け入れ

国内外から積極的に客員教員を受け入れた(平成 21 年度の客員教員は 6 名)。特に、研究の国際展開に向けて、海外の研究者を専任研究教育職員として 2 名、客員教員として 2 名採用した。

⑤科学研究費補助金等による研究活動の推進

平成 21 年度は 26 件(新規 12 件、継続 14 件)の科研費による研究を実施した。

資料 3 独創・発展型及び萌芽・発掘型共同研究一覧

〔独創・発展型〕

- ・接触方言学による「言語変容類型論」の構築
- ・大規模方言データの多角的分析
- ・近代語コーパス設計のための文献言語研究
- ・定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究
- ・日本語学習者用基本動詞用法辞典の作成

〔萌芽・発掘型〕

- ・テキストの多様性を捉える分類指標の策定
- ・仮名写本による文字・表記の史的研究
- ・訓点資料の構造化記述
- ・テキストにおける語彙の分布と文章構造
- ・文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究

観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

研究所の共同研究の実施状況は、次のとおりである。

①研究系共同研究プロジェクト

共同研究については、基幹型、独創・発展型、萌芽・発掘型のシステムを確立し、推進方法や成果の公表方法などを具体化させた。すべての基幹型プロジェクトが、公開研究発表会を平成 21 年度中に一回以上開催し(資料 4)、これら公開研究発表会については、研究所のホームページに開催案内並びに発表要旨を出すとともに、関係研究機関にも広報活動を行い、広く外部からの参加を可能とした。(資料 5)

研究所全体で国内外総計 305 名(延べ人数)からなる共同研究プロジェクトの体制は、研究者コミュニティの交流を大いに推進し、プロジェクトを越えた交流も盛んに実施した。

基幹型プロジェクトのうち、本研究所の際立った特色となるのは、(i)「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」と(ii)「現代語および歴史コーパスの構築と応用」である。

(i)については、ユネスコが発表した世界各地における消滅危機言語のうち、日本語の琉球諸方言を重点的に調査する共同研究に着手した。

(ii)については、欧米と比して遅れを取っていた現代日本語コーパス(大量の書き言葉を電子化したもので、1 億語を目標とする)の構築作業を平成 21 年度末において約 95% 完成させた。

②日本語教育研究プロジェクトの実施

日本語教育研究・情報センターにおいて「日本語教育・学習に資する調査研究」プロジェクトを立ち上げ、共同研究の方向性を明確化した。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

移管に向けての設置準備期間が1年数か月と短かったにもかかわらず、研究基盤整備は予想以上に進んだ。設置準備の途中で、社会的要請により追加して設置された日本語教育研究・情報センターについても、運営委員及び客員教授を通して関連研究者コミュニティの意向を反映させ、客観的で高水準の研究成果が期待できる組織を構築する見通しが立った。

以上を勘案して、期待される水準を大きく上回ると判断した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

本研究所がこの半年間に着手したプロジェクトの中には、全く新規に設定されたものもある一方、旧国語研での実績を踏まえて更に新しい方向へ展開するものもあり、中でも下記の成果が特記に値する。

① 日本語コーパスの構築

コーパス構築を支える科学研究費補助金特定領域研究は中間評価においてA評価(現行のまま推進すればよい)という最高評価を獲得した。また、専門誌『国文学解釈と鑑賞』、『人工知能学会誌』に特集が掲載された他、日本言語学会、英語コーパス学会、情報処理学会、漢字文献情報処理研究会などにおいて『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に関する報告を含むシンポジウムが開催される等、文系・理系双方からの関心と期待が非常に大きい。(Ⅱ表 87-6-1001)

② 学会賞の受賞

横山詔一教授をリーダーとする基幹型共同研究「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」の土台となる横山教授と朝日祥之准教授の共著論文「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」(『社会言語科学』11、pp. 64-75. 2008年)がその先進性を高く評価され、平成22年3月に社会言語科学会の学会賞「徳川賞優秀賞」を受賞した。本研究は国語研が愛知県岡崎市で1953年から50年間以上にわたって実施してきた敬語の大規模な経年調査の成果をベースとし、そこから得られたデータに基づき敬語意識の変化予測理論を構築し、敬語意識の変化が生年と調査年を説明変数とする多変量S字カーブで精度よく予測できることを示したものである。(Ⅱ表 87-6-1002)

③ 「病院の言葉」を分かりやすくする提案

旧国語研では、国民の言語生活の実態をとらえる調査研究を多数行ったが、なかでも『病院の言葉を分かりやすく一工夫の提案(勁草書房)』は大きな社会的反響を呼び、平成21年10月以降も医療関係の処方面から講演や原稿依頼が数多く寄せられている。(Ⅱ表 87-6-1004)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

旧国語研の研究を継承して実施した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」が、日本のコーパス言語学の学術水準を世界レベルに引き上げることが期待されるほどの成果を上げた意義は大きい。また論文「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」は、他分野の成果や方法を分野横断的に言語変化研究に適用するなど、トランス・ディシプリン(超領域)研究に資するものとして高く評価された。更に本研究所では、学術的のみならず、『病院の言葉』を分かりやすくする提案」によって、社会的にも大きく貢献した。

以上を勘案して、期待される水準を大きく上回ると判断した。

資料4 基幹型プロジェクトの公開研究発表会開催日一覧

< 理論・構造研究系 >

「日本語レキシコンの総合的研究」

① 「日本語レキシコンの音韻特性」

12月6日(日)第1回研究発表会開催

2月22日(月)第2回研究発表会開催

3月8日(月)第3回研究発表会開催

② 「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」

3月20日(土)第1回共同研究発表開催

③ 「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」

11月27日(金)第1回研究発表会開催

< 時空間変異研究系 >

「日本語の地理的変異」

① 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」

12月19日(土)第1回研究発表会開催

② 「方言の形成過程解明のための全国方言調査」

3月23日(火)第1回研究発表会開催

「日本語の社会的変異」

① 「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」

3月18日(木)第1回研究発表会開催

② 「日本語変種とクレオール形成過程」

11月6日(金)第1回研究発表会開催

< 言語資源研究系 >

「現代語および歴史コーパスの構築と応用」

① 「コーパスアノテーションの基礎研究」

1月15日(金)第1回研究発表会開催

② 「通時コーパスの設計」

3月3日(水)第1回研究発表会開催

③ 「コーパス日本語学の創成」

2月1日(月)第1回研究発表会開催

3月26日(金)第2回研究発表会開催

< 言語対照研究系 >

「世界諸言語との対照による日本語の言語類型論的特質の解明」

① 「形容詞節と体言締め文:名詞の文法化」

12月12日(土)～13日(日)第1回研究発表会開催

3月27日(土)～28日(日)第2回研究発表会開催

② 「節連接へのモーダル的・発話行為的な制限に関する研究」

12月12日(土)～13日(日)第1回研究発表会開催

3月27日(土)～28日(日)第2回研究発表会開催

③ 「テンス・アスペクト・ムードの相関に関する言語対照研究」

3月22日(月)第1回研究発表会開催

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例 1 「研究の国際化の進展（国際シンポジウム、コロキウムの開催など）」（分析項目 I）

（質の向上があったと判断する取組）

日本語が持つ言語としての普遍性と特質をより広い視野から解明するために、大学共同利用機関への移管後、研究の国際化に積極的に取り組み、半年間に 2 回の国際学術フォーラム及び海外の研究者を講師とするコロキウムを開催した（別添資料 1）。さらに各研究分野の第一線で活躍する研究者を海外から招待するだけでなく、専任及び客員としても迎え、所内外、国内外の研究者の活発な恒常的交流を実現させた。客員研究員の制度を持たない独立行政法人だったときと比べ、大きく国際化が図られたと判断する。

②事例 2 「情報発信体制の整備（文献、研究情報の web 化）」（分析項目 I）

（質の向上があったと判断する取組）

旧国語研が書籍で刊行してきた『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の刊行を中止し、代わりに、両者の研究情報を一括管理してウェブ上でオンラインで発信する体制を整備し、平成 22 年度初頭に公開できるようにした。

③事例 3 「日本語教育研究・情報センターの体制強化」（分析項目 I）

（質の向上があったと判断する取組）

独立行政法人国立国語研究所の解散に伴う法的措置において、移管後も「外国人に対する日本語教育に資する調査研究」を行うことが求められたことに伴い、旧国語研の「日本語教育基盤情報センター」が果たした役割を新国語研においては「日本語教育研究・情報センター」として承継することとなった。研究者コミュニティ内外の要請に応えるため、当該センターの運営体制の強化を検討するための小委員会を運営会議内部に設置し、方向性ならびに研究・運営体制を明確化した。小委員会は、日本語教育に関する研究実績のある複数の運営委員（外部委員）ならびに客員教員、センターの研究員から構成されており、この分野を代表するものとしての性格も併せ持っている。第二期中期計画では、人員配置も含め、旧国語研より一層充実した体制と理念のもと、日本語教育研究・情報センターの運営が展開される見通しが立っている。

資料5 主な共同研究プロジェクトの推進状況

(A) 日本語レキシコンの総合的研究（所長 影山太郎）

日本語レキシコン（語彙）が持つ音韻的・形態的・意味的特性を総合的に解明することを目的とするプロジェクト。共同研究者は国内の主要国公立大学及び海外（アメリカ、中国）からの合計約60名で、年度内に研究発表会を4回開催した。毎回4～5名が研究発表を行い、外部の諸大学から教員及び若手研究者の参加を得た。

(B) 文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（理論・構造研究系 横山詔一）

日本語の文字や方言に関する社会言語科学の研究に貢献するレキシコン変化理論を導出するために、国語研に蓄積された資料にもとづいて分野横断的な実証的研究を展開するプロジェクト。年度内に2回の公開研究発表会を開催し、異体字選好理論のほか、山形県鶴岡市における共通語化調査について国内4大学の研究者による発表を行った。

(C) 方言の形成過程解明のための全国方言調査（時空間変異研究系 大西拓一郎）

方言分布形成過程を解明することを目標とするプロジェクト。①旧国語研の成果である「言語地図」に基づく具体的項目のデータベース化、②データベースを基盤とした研究目的にかなう調査項目の選定、③選定した項目をもとにした全国規模のパイロット調査の実施、④パイロット調査に基づく本調査項目の選定、⑤研究目的に適合した本調査の基本方針（調査方法・調査対象者を含む）の確定、⑥調査分担・協力体制の基本計画の確定の6点を実施した。なお、本研究の基礎を形成する国立国語研究所第14回国際シンポジウム（平成19年8月）の発表論文集は国内外で高い評価を受け、現在、英語版の出版準備が進められている。

(D) 現代語および歴史コーパスの構築と応用（言語資源研究系 前川喜久雄）

旧国語研で構想したKOTONOHANA計画の一部として、5年計画で構築を開始した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築作業を推進するとともに、構築したデータの一部を外部公開した。同時に科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」（領域代表者：前川）と連携してこのコーパスを利用した研究を基礎と応用の両面で推進した。次年度からの本格実施に向けて「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの設計」の基幹的共同研究のための準備的研究を実施した。

(E) 形容詞節と体言締め文（言語対照研究系 角田太作）

日本語の特徴の一つである体言締め文という構文が世界の諸言語に存在するのかどうかを明らかにするために、アジアの諸言語を中心に通言語的な研究を行うプロジェクト。年度内に2回の公開発表会を開催し、日本語、琉球語、アイヌ、韓国語、その他の言語について研究発表を行った。